

本文

本文

人のかたちを語り聞こえさせば、物語ひさがなくや侍るべき。①(ただいまをや)。さしあたりたる人のことは、わづらはし。いかにぞやなど、少しもかたほなるは、言ひ侍らじ。

宰相の君は、(中略)ふくらかに、いと様体細めかしく、かどかどしきかたちしたる人の、②(うち見たるよりも)、見もてゆくに、こよなくうちまさり、らうらうしくて、口つきに、はづかしげさも、にほひやかなることも添ひたり。もてなしいと美々しく、はなやかにぞ見えたまへる。心ざまもいとめやすく、心うつくしきものから、またいとはづかしきところ添ひたり。

小少将の君は、そこはかたなくあてになまめかしく、二月ばかりのしだり柳のさましたり。様体いとうつくしげに、もてなし心にくく、心ばへなども、わが心とは思ひとる方なきやうに物慎みをし、いと世をはぢらひ、あまり見苦しきまで子めきたまへり。腹汚き人、悪しざまにもてなし言ひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をも失ひつべく、あえかにわりなきところつきたまへるぞ、③(あまりうしろめたげなる)。

宮の内侍ぞ、またいと清げなる人。丈立ちいとよきほどなるが、ゐたるさま、姿つき、いともものものしく、今めきたる様体にて、細かに、とりたててをかしげにも見え[A]ものから、いとももの清げに、そびそびしく、中高き顔して、色のあはひ白さなど、人にすぐれたり。頭つき、髪状、額つきなどぞ、あなものの清げと見えて、はなやかに愛敬づきたる。ただありにもてなして、心ざまなどもめやすく、つゆばかりいづ方ざまにもうしろめたき方なく、全てさこそあら[B]と、人のためにしつべき人柄なり。艶がり由めく方はなし。

式部のおもとは、妹なり。いとふくらけさ過ぎて肥えたる人の、色いと白くにほひて、顔ぞいと細かによく侍る。髪もいみじくうるはしくて、長くはあらざるべし、つくろひたるわざして、宮には参る。太りたる様体の、いとをかしげにも侍りしかな。目見、額つきなど、まことに清げなる、うち笑みたる、愛敬も多かり。

若人の中もかたちよしと思へるは、小大輔、源式部など。小大輔は、ささやかなる人の、様体いと今めかしきさまして、髪うるはしく、もとはいとこちたくて、丈に一尺余りあまりたり[C]を、おち細りて侍り。顔もかどかどしく、あなをかしの人やとぞ見えて侍る。かたちは直すべきところなし。源式部は、丈よきほどに、そびやかなるほどにて、顔細やかに、見るままにいとをかしく、らうたげなるけはひ、もの清くかはらかに、④(人の娘とおぼゆるさましたり)。

小兵衛、少貳なども、いと清げに侍り。それらは殿上人の見残す少なかなり。誰も、とりはづしては隠れなけれど、人ぐまをも用意するに、隠れてぞ侍るかし。

(中略)

かう言ひ言ひて、心ばせぞかたくは侍るかし。それも、とりどりに、いと悪きもなし。また、すぐれてをかしく、心重く、かどゆゑも、由も、うしろやすさも、みな具することはかたし。さまざま、いづれをかとるべきとおぼゆるぞ多く侍る。さもけしからずも侍ることどもかな。

(紫式部『紫式部日記』による)

(注)

- さしあたりたる人＝さしあたって顔を合わせる人。
- 少しもかたほなるは＝少しでも未熟なところがある人のことは。
- かどかどしきかたち＝才気ばしった理知的な容貌。
- 二月ばかりのしだり柳のさま
＝陰暦二月頃に新芽が芽ぶいた柳のように、初々しくなよやかなさま。
- そびそびしく＝すらりとしていて。
- 中高き顔＝鼻筋の通った顔。
- 色のあはひ白き＝黒髪に映えた顔の色合いの白さ。
- 艶がり由めく方＝風流ぶったり由緒ありげに気取ったりするところ。
- 妹なり＝式部のおもとは、宮の内侍の妹であった。
- つくろひたるわざして＝付け髪をして。
- かはらかに＝こざっぱりとして。
- 人ぐま＝人の目の届かない所。
- かどゆゑも＝才覚や風情も。

問題

問題

問一 傍線部①「ただいまをや」とありますが、この内容を説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [21]

- ① 人の容姿についてお話し申し上げると、会話が大変盛り上がるものなので、今すぐにでも申し上げることにしようということ。
- ② 人の容姿についてお話し申し上げると、会話が大変盛り上がるものだが、今すぐ上げるのはよくないことだろうということ。
- ③ 人の容姿についてお話し申し上げるのはたちが悪いことだが、それでも現在生きている人について申し上げるのであれば、問題ないだろうということ。
- ④ 人の容姿についてお話し申し上げるのはたちが悪いことであり、それも現在生きている人について申し上げるとなると、なおさら悪いだろうということ。

問二 傍線部②「うち見たるよりも、見もてゆくに、こよなくうちまさり」の解釈として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [22]

- ① じっと見た時よりも、すれ違いざまにふと見た時の方が、とても美しく見えて
- ② こっそり見た時よりも、正面から向かい合って見た時の方が、とても美しく見えて
- ③ ちらりと見た時よりも、何度も会って見ているうちに、大変すぐれて見えるようになり
- ④ 最初に見た時よりも、成長していく姿を見ているうちに、大変すぐれて見えるようになり

問三 傍線部③「あまりうしろめたげなる」とありますが、作者が小少将の君についてこのように思った理由として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [23]

- ① 小少将の君は、意地の悪い人や、悪い態度をとったり事実と違うことを言いつけたりする人があれば、そのままそれを気にして思い悩んで、死んでしまいそうなほど、繊細すぎるところがあるから。
- ② 小少将の君は、意地の悪い人や、悪い態度をとったり事実と違うことを言いつけたりする人があれば、まずは相手のことを思いやって、相手の欠点を直してあげようとするほど、親切ですばらしいところがあるから。
- ③ 小少将の君は、下品な人や、礼儀作法がなっていなかったり言葉遣いが悪かったりする人があれば、すぐに我慢できなくなって、相手に危害を加えてしまいそうなほど、激情的で容赦のないところがあるから。

④ 小少将の君は、下品な人や、礼儀作法がなっていなかったり言葉遣いが悪かったりする人があれば、後でそれをもとに自分の言動を省み、自分の欠点を直そうとするほど、真面目すぎるところがあるから。

問四 空欄 [A] ～ [C] を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

解答番号 [24]

- ① A たる B しむれ C ぬ
- ② A ぬ B め C ける
- ③ A けむ B じ C ける
- ④ A ざる B ましか C ぬ

問五 傍線部④「人の娘とおぼゆるさましたり」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [25]

- ① 関白殿の姫君かと思われる豪華な服装をしている。
- ② 召使いの少女かと思われる質素な生活をしている。
- ③ どこかの姫君かと思われる初々しい風情である。
- ④ 自分の子どもかと思われるなれなれしい態度である。

問六 傍線部⑤「さもけしからずも侍ることどもかな」とありますが、この内容を説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [26]

- ① これまで登場した女房の中に、容姿も気性ともにすぐれている人がいないのは、情けないということ。
- ② どんな人でも、才覚・風情などのすぐれた気性を全て備えることはできないのは、残念だということ。
- ③ 人間として容姿と気性のどちらを重視すべきか、決めかねているのは、優柔不断だということ。
- ④ 他人の容姿や気性について好き勝手に批評しているのは、感心できないということ。

問七 この文章の内容に合致するものを一つ選びなさい。

解答番号 [27]

- ① 宰相の君は、気性も穏やかで素直だが、その一方で、作者がはずかしく感じるほどの欠点もある。

② 式部のおもとは、色白で、顔の造作も実によく整っているが、太りすぎているのが滑稽である。

③ 小大輔は、小柄で今風の様子をしており、容姿には非の打ちどころがないが、その性格には問題がある。

④ 小兵衛と少貳は、殿上人が見過ごしがたいほどに美しいので、うっかり恋の噂が立たないように用心している。

問八 『紫式部日記』より前に成立した作品を一つ選びなさい。

解答番号 [28]

①『明月記』

②『土佐日記』

③『更級日記』

④『海道記』

問題と解説

問題と解説

問一

【問題】

傍線部①「ただいまをや」とありますが、この内容を説明したものとして最も適切なものを一つ選びなさい。

- ① 人の容姿についてお話し申し上げると、会話が大変盛り上がるものなので、今すぐにでも申し上げることにしようということ。
- ② 人の容姿についてお話し申し上げると、会話が大変盛り上がるものだが、今すぐ申し上げるのはよくないことだろうということ。
- ③ 人の容姿についてお話し申し上げるのはたちが悪いことだが、それでも現在生きている人について申し上げるのであれば、問題ないだろうということ。
- ④ 人の容姿についてお話し申し上げるのはたちが悪いことであり、それも現在生きている人について申し上げるとなると、なおさら悪いだろうということ。

【解説】

正解: ④

・思考プロセス

1. 文脈把握: 直前で「人のかたちを語り聞こえさせば……ひさがなくや侍るべき(人の容姿を噂するのは、よくないことでしょう)」と、批評行為自体をネガティブに捉えている。
2. 係助詞「や」の識別: ここでの「や」は、省略を含んだ反語、あるいは強い詠嘆。「(一般論でもよくないのに)まして、現在生きている人(ただいま)については、なおさら(言うべきではない／言いにくい)」というニュアンスになる。
3. 直後の文: 「さしあたりたる人(現在目の前にいる人)のことは、わづらはし(差し障りがあって面倒だ)」と続いていることから、ネガティブな文脈であることが確定する。
4. 選択肢吟味: ①②は「盛り上がる」というポジティブな解釈がズレている。③は「問題ない」としている点が誤り。④が文脈(遠慮・自重)に最も合致する。

問二

【問題】

傍線部②「うち見たるよりも、見もてゆくに、こよなくうちまさり」の解釈として、最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① じっと見た時よりも、すれ違いざまにふと見た時の方が、とても美しく見えて
- ② こっそり見た時よりも、正面から向かい合って見た時の方が、とても美しく見えて
- ③ ちらりと見た時よりも、何度も会って見ているうちに、大変すぐれて見えるようになり
- ④ 最初に見た時よりも、成長していく姿を見ているうちに、大変すぐれて見えるようになり

【解説】

正解: ③

・思考プロセス

1. 単語分析:

- ・「うち見る」= ちよっと見る、ちらっと見る。
- ・「見もてゆく」= 「もてゆく」は進行・継続。「見続けていく」「付き合いの中で見ていく」こと。
- ・「こよなく」= 格段に。
- ・「まさる」= 優れている。

2. 解釈: 「パッと一瞬見た時よりも、長く付き合っよく見ていくうちに、格段に良く見えてくる」という意味だ。

3. 選択肢吟味: ①は逆(じっと見るvsふと見る)。②の「こっそりvs正面」、④の「成長」は本文に根拠がない妄想だ。③が単語の意味に忠実である。

問三

【問題】

傍線部③「あまりうしろめたげなる」とありますが、作者が小少将の君についてこのように思った理由として、最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① 小少将の君は、意地の悪い人や、悪い態度をとったり事実と違うことを言いつけたりする人があれば、そのままそれを気にして思い悩んで、死んでしまいそうなほど、繊細すぎるところがあるから。
- ② 小少将の君は、意地の悪い人や、悪い態度をとったり事実と違うことを言いつけたりする人があれば、まずは相手のことを思いやって、相手の欠点を直してあげようとするほど、親切ですばらしいところがあるから。
- ③ 小少将の君は、下品な人や、礼儀作法がなっていなかったり言葉遣いが悪かったりする人があれば、すぐに我慢できなくなって、相手に危害を加えてしまいそうなほど、激情的で容赦のないところがあるから。
- ④ 小少将の君は、下品な人や、礼儀作法がなっていなかったり言葉遣いが悪かったりする人があれば、後でそれをもとに自分の言動を省み、自分の欠点を直そうとするほど、真面目すぎるところがあるから。

【解説】

正解: ①

・思考プロセス

1. 単語の罣:「うしろめたし」は現代語の「やましい」ではない。「(相手の先行きが)心配だ、気がかりだ」という意味だ。ここを間違えると全滅する。

2. 因果関係の特定:なぜ心配なのか? 直前の文を見る。

・「腹汚き人……あらば(意地の悪い人がいれば)」

・「やがてそれに思ひ入りて(すぐにそれを思い詰めて)」

・「身をも失ひつべく(死んでしまいそうで)」

・「あえかにわりなき(華奢でむやみに弱い)」

3. 選択肢吟味:彼女は繊細すぎて、悪意に触れると死んでしまいそうなほど弱い。だから見ていて「心配(うしろめたげ)」なのだ。これを説明しているのは①のみ。②④のような「相手を直す」「自分を直す」という強さは描かれていない。

問四

【問題】

空欄 [A] ～ [C] を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

- ① A たる B しむれ C ぬ
- ② A ぬ B め C ける
- ③ A けむ B じ C ける
- ④ A ざる B ましか C ぬ

【解説】

正解: ②

・思考プロセス

1. 空欄Aの分析: 「とりたててをかしげにも見え [A] ものから」。

・「ものから」は逆接(～ものの)。「とりたてて美しくも見え【ない】けれど(実は上品で...)」という文脈になる。

・打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」が入る。「見え(未然形)」+「ぬ」。

2. 空欄Bの分析: 「全てさこそあら [B] と」。

・係助詞「こそ」があるので、結びは已然形。

・文脈は「(欠点がないので)全てそのよう(完璧)であろうと思う」。推量の助動詞「む」の已然形「め」が適切。

3. 空欄Cの分析: 「丈に一尺余りあまりたり [C] を」。

・小大輔の髪について、昔は長かったという事実を述べている(今は落ち細っている)。

・過去の事実・回想を表す助動詞「けり」の連体形「ける」が入る。

4. 以上より、ぬ・め・ける の組み合わせである②が正解。

問五

【問題】

傍線部④「人の娘とおぼゆるさましたり」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① 関白殿の姫君かと思われる豪華な服装をしている。
- ② 召使いの少女かと思われる質素な生活をしている。
- ③ どこかの姫君かと思われる初々しい風情である。
- ④ 自分の子どもかと思われるなれなれしい態度である。

【解説】

正解: ③

・思考プロセス

1. 古文常識「人」: 特定の修飾なく「人」という場合、「一人前の身分の人」「しかるべき家柄の人」を指すことが多い。
2. 文脈: 源式部は「らうたげなるけはひ(かわいらしい様子)」で「もの清くかはらか(さっぱりして上品)」だと褒められている。
3. 選択肢吟味: 「人の娘」は「良家のお嬢様」というニュアンス。③「どこかの姫君かと思われる初々しい風情」が最も近い。①の「関白殿」は具体化しすぎ、②の「召使い」は文脈不適、④の「自分の子ども」は完全な誤読。

問六

【問題】

傍線部⑤「さもけしからずも侍ることどもかな」とありますが、この内容を説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① これまで登場した女房の中に、容姿も気性ともにすぐれている人がいないのは、情けないということ。
- ② どんな人でも、才覚・風情などのすぐれた気性を全て備えることはできないのは、残念だということ。
- ③ 人間として容姿と気性のどちらを重視すべきか、決めかねているのは、優柔不断だということ。
- ④ 他人の容姿や気性について好き勝手に批評しているのは、感心できないということ。

【解説】

正解: ④

・思考プロセス

1. 単語分析: 「けしからず」= 不都合だ、よろしくない、感心しない。
2. 文脈把握: 紫式部はここまで、同僚たちの容姿や性格をあれこれ品定めしてきた。「いづれをかとるべき(どっちが優れているか)」などと比較もしている。
3. 自省のニュアンス: 一通り語った後で、「(人の品定めなんて)なんとまあ、感心しないことですね」と、自分の行為を棚に上げて、あるいは自嘲気味に振り返っている場面だ。
4. 選択肢吟味: ④「好き勝手に批評しているのは、感心できない」が、この「けしからず」の対象として最も適切。他の選択肢は、批評の内容そのものに対する嘆きになっており、紫式部の「批評家としてのポーズ」を捉えきれていない。

問七

【問題】

この文章の内容に合致するものを一つ選びなさい。

- ① 宰相の君は、気性も穏やかで素直だが、その一方で、作者がはずかしく感じるほどの欠点もある。
- ② 式部のおもとは、色白で、顔の造作も実によく整っているが、太りすぎているのが滑稽である。
- ③ 小大輔は、小柄で今風の様子をしており、容姿には非の打ちどころがないが、その性格には問題がある。
- ④ 小兵衛と少貳は、殿上人が見過ごしがたいほどに美しいので、うっかり恋の噂が立たないように用心している。

【解説】

正解: ④

・思考プロセス

1. ① 誤り: 「はづかし」は**「(こちらが恥ずかしくなるほど相手が)立派だ」**というプラスの単語。これを「欠点」「恥ずかしい」と訳すのは中堅私大で最も多いひっかけパターンだ。
2. ② 誤り: 「いとをかしげにも侍りしかな(とても美しかったですよ)」とある。太っていることを「滑稽(笑える)」とは言っていない。平安美人＝ふくよか、が基本だ。
3. ③ 誤り: 小大輔について、性格に問題があるという記述はない。「あなをかし(ああ興味深い)」と言っているだけだ。
4. ④ 正解: 「殿上人の見残す少なかなり(殿上人が見逃すことは少ない＝注目されている)」。「人ぐまをも用意するに、隠れてぞ侍る(人目のつかない所にも気を配って、隠れています)」。「美しく目立つからこそ、慎み深く隠れている」という記述と合致する。

問八

【問題】

『紫式部日記』より前に成立した作品を一つ選びなさい。

- ①『明月記』
- ②『土佐日記』
- ③『更級日記』
- ④『海道記』

【解説】

正解: ②

・思考プロセス

1. 基準点: 『紫式部日記』は平安中期(1010年頃)。一条天皇の中宮彰子に仕えていた時期だ。

2. 各作品の時代:

- ・①『明月記』: 鎌倉時代初期(藤原定家の日記)。×
- ・②『土佐日記』: 平安前期(935年頃、紀貫之)。かな日記の祖。『紫式部日記』より約70～80年前。○
- ・③『更級日記』: 平安後期(1060年頃、菅原孝標女)。作者は『源氏物語』を読んで育った世代。つまり紫式部の後。×
- ・④『海道記』: 鎌倉時代の紀行文。×

3. 文学史は「流れ」で覚えること。『土佐』→『蜻蛉』→『枕』・『源氏』・『紫式部』→『更級』の順だ。

和訳

和訳

【冒頭：批評の心得】

人の容姿をいちいちお話し申し上げたならば、話は尽きることがないでしょう。(昔の人や一般論でも良くないのに)まして、①現在生きている人のことは言うまでもありません(言うべきではありません)。さしあたって顔を合わせる人のことを言うのは、面倒なことです。「どうだろうか」などと、少しでも未熟な点がある人のことは、言いますまい。

【宰相の君】

宰相の君は、(中略)ふっくらとして、とても容姿が整っていて、才気ばしった理知的な顔立ちをしている人が、②ぱっと見た時よりも、見慣れていくうちに、格段に優れて見え、洗練されていて、口元などに、こちらが気後れするほど立派な様子も、艶やかな魅力も備わっている。振る舞いはとても堂々として、華やかに見えていच्छる。気立てもとても感じがよく、素直でかわいらしい一方で、またとても(こちらが恥ずかしくなるほど)立派なところも備わっている。

【小少将の君】

小少将の君は、どこことなく上品で優美で、二月ごろの(新芽が出たばかりの)しだり柳のような風情をしている。容姿はとてもかわいらしく、振る舞いは奥ゆかしく、気立てなども、自分の意志というものを持ち合わせないかのように物慎みをし、とても世間を恥ずかしがり、あまりに見苦しいほどに子供っぽくいच्छる。腹黒い人や、悪意を持って事実と違うことを言いふらす人がいたならば、すぐにそれを真に受けて思い悩み、我が身を滅ぼしてしまいそうで、華奢でむやみに弱いところがおありなのが、③あまりに見ていてハラハラさせられます(心配です)。

【宮の内侍】

宮の内侍こそ、またとてもさっぱりとして美しい人。背丈の釣り合いがとてもよい程度である上に、座っている様子や、後ろ姿が、とても堂々として、現代風の容姿であって、顔立ちはこまやかで、とりたてて美しいとも見え[A]ないものの、とてもさっぱりと美しく、すらりとしていて、鼻筋の通った顔をして、肌の色の白さなどは、人より優れている。頭の形、髪の様子、額のあたりなどは、「ああ、なんと美しい」と見えて、華やかで愛嬌がある。ただ自然体で振る舞っていて、気立てなども感じがよく、少しもどの点においても(将来が)心配な点はなく、全てそのよう(見た目通り完璧)で[B]あろうと、誰にとっても思われるような人柄である。風流ぶったり由緒ありげに気取ったりするところはない。

【式部のおもと】

式部のおもとは、(宮の内侍の)妹である。たいそうふっくらとしすぎて太っている人で、色がとても白く艶があって、顔立ちはとてもこまやかで整っております。髪もたいそう整っていて美しく、(自分の髪は)長くはないのでしょう、付け髪をして、中宮様の御所には参上する。太っている容姿が、とても愛嬌があって美しくもありましたよ。目元や、額のあたりなどは、本当にさっぱりと美しく、にっこり笑っている様子は、愛嬌もたっぷりある。

【若人たち】

若い女房の中にも容姿が良いと思えるのは、小大輔、源式部など。

小大輔は、小柄な人で、容姿がとても現代風な様子をしていて、髪が整って美しく、もとは(髪
量が)とても大げさなほど多くて、背丈より一尺あまりも余って[C]たのだが、(今は)抜け落ち
て細くなっております。顔立ちも才気ばしって、「ああ、おもしろい(興味深い)人だなあ」と見える
のです。容姿は直すべき欠点がない。

源式部は、背丈がよいほどで、すらっとしている感じで、顔立ちはこまやかで、見るからにとても
趣深く、かわいらしい様子で、さっぱりとして上品で、④良家のお嬢様と思われる様子をしていま
す。

【その他・結び】

小兵衛や、少弐なども、とてもさっぱりとして美しいです。それらの人は、殿上人が見逃すことは
少ない(＝よく注目されている)ようです。誰も、(勤務時間外で)とくべつな時でなければ隠れるも
のですが、(彼女たちは美しく目立つので)人の目が届かない所にも気を配って、隠れておりま
すよ。

(中略)

このようにあれこれと言って、人の心のありようというのは難しいものですね。それも、人それぞ
れで、とても悪いという人もいません。かといってまた、格別に趣深く、思慮深く、才覚や風情も、
由緒も、安心感も、みな備えているということは難しいことです。さまざまに、誰を優れているとす
るべきかと思われることが多くございます。(人の品定めをするなんて)⑤なんともまあ、感心しな
いことですね。

練習問題と解答

練習問題

第1章:最重要古文単語チェック:【】内の意味

(1) いかにぞやなど、少しも【かたほなる】は、言ひ侍らじ。

ア. 頑固で融通がきかない

イ. 未熟で不十分だ

ウ. 偏屈で性格が悪い

(2) 【らうらうしくて】、口つきに、【はづかしげさ】も……添ひたり。

・【らうらうじ】

ア. 騒がしく活発だ

イ. 洗練されていて巧みだ

ウ. 気後れしてオドオドしている

・【はづかし】

ア. (こちらが恥ずかしくなるほど)立派だ

イ. 恥ずかしくて穴に入りたい

ウ. みっともない

(3) 心うつくしき【ものから】、またいとはづかしきところ添ひたり。

ア. ～ので(順接)

イ. ～ものの(逆接)

ウ. ～ことよ(詠嘆)

(4) あえかにわりなきところつきたまへるぞ、あまり【うしろめたげなる】。

ア. 気がとがめて申し訳ない

イ. 隠し事をしている怪しい

ウ. 先行きが心配で気がかりだ

(5) さも【けしからず】も侍ることどもかな。

ア. 異様で不思議だ

イ. 不都合で感心しない

ウ. 並々ではなく素晴らしい

第2章: 文法・識別

次の文中の【 】で示した箇所の文法的説明について、正しい判断をなさい。

(1)「人のかたちを語り聞こえさせば、物語ひさがなく【や】侍るべき。」

- この【や】の文法的意味と、文末「べき」の活用形を答えよ。
- (ヒント: 単なる疑問か、反語か。文末との係り結びをチェック)

(2)「とりたててをかしげにも見え【ぬ】ものから」

- この【ぬ】の文法的説明として正しいものはどっち？

A. 打消の助動詞「ず」の連体形

B. 完了の助動詞「ぬ」の終止形

(3)「全てさこそあら【め】と」

- この【め】の基本形(終止形)と意味を答えよ。
- (ヒント:「こそ」の結びであることに注意。)

(4)「丈に一尺余りあまりたり【ける】を」

- この【ける】が表す意味は？

A. 過去の伝聞(～だったそうだ)

B. 過去の事実・回想(～だったなあ・～であった)

C. 詠嘆(～だなあ)

第3章:文学史(必須知識)

次の問いに答えよ。

(1)『紫式部日記』の作者が仕えた人物は誰か。

ア. 中宮定子

イ. 中宮彰子

ウ. 皇太后詮子

(2) 次の日記文学を、成立した時代が古い順に並べ替えよ。

A.『更級日記』(菅原孝標女)

B.『土佐日記』(紀貫之)

C.『紫式部日記』(紫式部)

(並べ替え: → →)

練習問題の解説

第1章: 最重要古文単語チェック

(1) 正解: イ(未熟で不十分だ)

本文の注釈にもある通り、「かたほなり」は不完全・未熟であることを指す。対義語は「まほなり(完全だ)」だ。

紫式部は冒頭で「少しでも未熟(かたほ)な人のことは、噂話として言いますまい」と宣言している。

(2) 正解: 【らうらうじ】イ / 【はづかし】ア

・らうらうじ: 「才気があって洗練されている」「物慣れていて巧みだ」というプラス評価の語。宰相の君の美しさを褒めている文脈だ。

・はづかし: 現代語の「恥ずかしい(マイナス)」ではない。「(こちらが恥ずかしくなるほど相手が)立派だ・優れている」という最上級のプラス単語だ。

・中堅私大では、この単語をマイナス(欠点があるetc.)と誤読させるひっかけ問題が頻出する。

(3) 正解: イ(～ものの【逆接】)

・【解説】

「～ものから」は逆接の接続助詞。「とりたててをかしげにも見えぬものから(とりたてて美しくも見えないものの、実は上品で……)」という文脈を作る。

(4) 正解: ウ(先行きが心配で気がかりだ)

・【解説】

「うしろめたし」は「後ろめたい(やましい)」ではない。「(相手の将来が)心配だ、気がかりだ」という意味だ。

小少将の君があまりに繊細で、悪意に触れると死んでしまいそうだから、見ていて「心配(うしろめたげ)」なのだ。

(5) 正解: イ(不都合で感心しない)

・【解説】

「けしからず」は「異様だ」という意味もあるが、ここでは「不都合だ、よろしくない、感心しない」というマイナス評価。

他人の品定めをしている自分自身の行為を振り返り、「(こんな噂話をするなんて)我ながら感心しないことだなあ」と自省している場面だ。

第2章: 文法・識別ドリル

(1) 意味: 反語(～だろうか、いや～ない) / 活用形: 連体形

・【解説】

「ひさがなくや侍るべき」。係助詞「や」があるため、文末は連体形「べき」で結ばれる(係り結び)。

文脈は「人の容姿を語ればキリがない。まして今の人のことは言うべきだろうか(いや、言うべきではない)」という反語(または強い詠嘆)だ。

(2) 正解: A(打消の助動詞「ず」の連体形)

・【解説】

「見えぬものから」。

「見え」は「見ゆ(下二段)」の未然形。「未然形＋ぬ」なので、この「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形だ。

(もし完了の「ぬ」なら、連用形「見え」に接続するが、文脈的にも「見えないけれど」という打消の意味が通る)。

(3) 基本形:む / 意味:推量

•【解説】

「さこそあらめ」。

係助詞「こそ」の結びなので、已然形になっている。

「あら」はう変「あり」の未然形。「未然形＋む」なので、これは推量の助動詞「む」の已然形だ。意味は「(全て)そのようであるだろう」。

(4) 正解:B(過去の事実・回想)

•【解説】

「余りあまりたりけるを」。

「けり」は「和歌での詠嘆」か「過去」だが、散文(普通の文章)では基本的に「過去(～た、～であった)」と訳す。

小大輔の髪が、かつては背丈より一尺も余っていたという過去の事実を述べている。

第3章:文学史

(1) 正解:イ(中宮彰子)

•【解説】

『紫式部日記』は、一条天皇の中宮彰子(藤原道長の娘)に仕えていた時期の記録だ。

ちなみに、ライバルの清少納言(『枕草子』)が仕えたのは中宮定子だ。セットで覚えよう。

(2) 正解:B → C → A

•【解説】平安日記文学の「流れ」を押さえよう。

1. B『土佐日記』(紀貫之・平安前期・935年頃):かな日記の元祖。

2. C『紫式部日記』(紫式部・平安中期・1010年頃):『源氏物語』と同時期。

3. A『更級日記』(菅原孝標女・平安後期・1060年頃):作者は『源氏物語』を読んで育った世代(紫式部のファン)だ。